宮野遺跡発掘調査概要

1982

門真市教育委員会

はしがき

河内平野の北端部に位置する門真市は、平坦な冲積地が広がり、かっては、一面蓮田の広々とした風景も各所で見られたものである。現在、淀川から分かれた古川が市域を貫流しているが、宮野町の堤根神社社殿北側には古川に沿うように堤が残っている。この堤は、記・紀にしるす茨田堤と伝承されるが、その当否は別として、冲積地を開発する為の人々の努力を偲ばせるには充分である。その南一帯には、古墳時代以降の複合遺跡である宮野遺跡が広がる。伝茨田堤と共に冲積地開発の歴史を物語る重要な遺跡である。市内にはその他にも新たに発見された常弥寺遺跡が見られる他、銅鐸が出土した大和田遺跡もあり、歴史の古さと祖先の営為を知らしめてくれる。

今回、宮野遺跡で、マンション建築工事にあたり、調査を実施したところ、室町時代の木組みや古墳時代の遺物包含層を確認し、遺跡の上限と性格の一端を明らかにしえた。門真市も産業都市として新たな発展をとげている今日、当報告が、その礎となった祖先の足跡を偲び、文化財の重要性を一層認識して頂く一助になれば幸いです。

最後に、調査にあたりご協力頂いた皆様に厚く感謝の意を表すると共に、今後なお一層のご協力をお願いする次第です。

門真市教育委員会

教育長　千田福一

例　　言

1. 本書は、大阪府教育委員会が門真市教育委員会の協力を得て実施した門真市宮野町所在宮野遺跡の発掘調査概要報告書である。

2. 調査は、大阪府教育委員会文化財保護課技師田中和弘、同大野薫を担当者として実施した。調査期日は下記の通りである。

第１次調査　昭和55年６月24・25日
２　〃　　〃　７月７日～14日
３　〃　　〃　７月22日

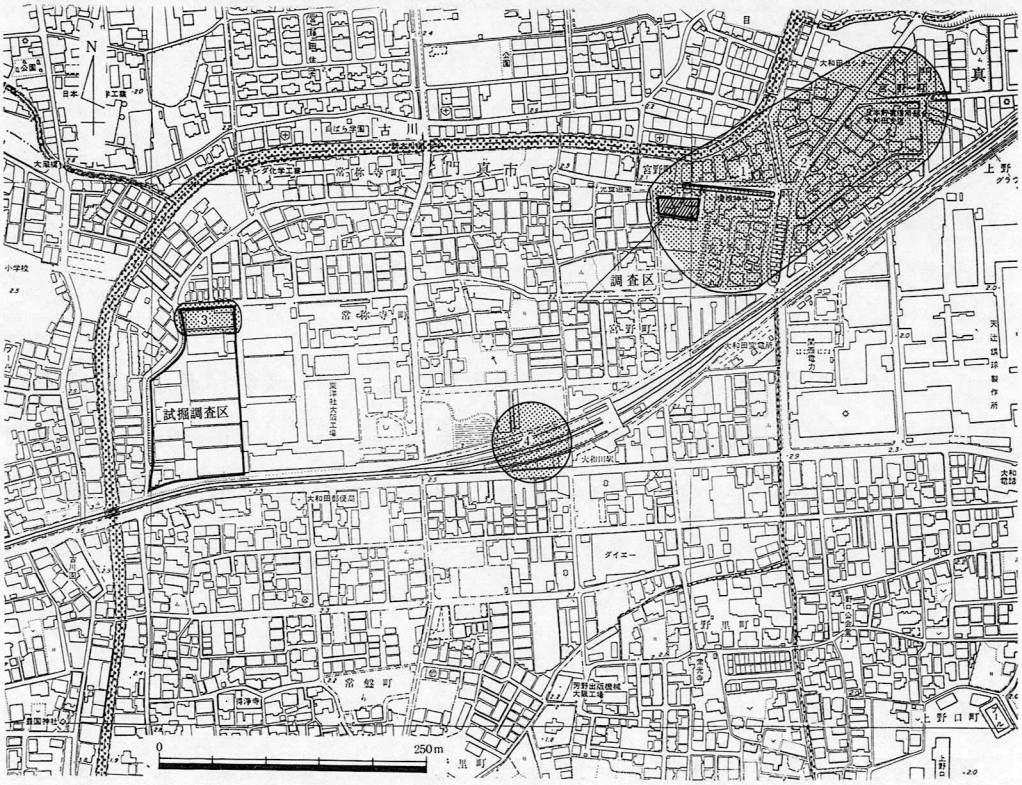
3. 調査の実施と整理にあたっては、村本建設株式会社　門真市市史編纂室、また、白岩勉、阿南辰秀、玉田一成、近岡淳彦、政木欣之、森下稔之、米尾宗也、黒岡洋子、林優美、藤原喜信、川村和子、染川佳美、岩井由紀子、南　泉、大野清子、西村清美、諸氏の協力があった。記して感謝の意を表する。

4. 本書の執筆は、田中和弘、大野薫が分担して行なった。

は　じ　め　に

宮野遺跡は、京阪電車大和田駅の北東に広がり、従来から、室町時代を中心とする遺物の出土が知られている。今回調査した個所は、堤根神社の西、伝茨田堤の南に隣接した地点（fig．1・PL．5）で、マンション建設工事に伴ない、緊急調査を実施したものである。

門真市周辺は、縄文時代初頭には、まだ海であり(註1)、その後、淀川やその支流による冲積作用で陸地化が進んだ地帯である。しかし中で、調査区周辺は、地山面の標高が比較的高く、陸地化がより早かったと考えられる。かって、大和田駅構内で銅鐸が出土し、遅くとも弥生時代には、陸地化が進んでいた事をうかがわせる。今回調査した宮野遺跡は、その北東約２００ｍ～５００ｍにある。古墳時代の土師器・須恵器、平安時代から江戸時代にわたる(土器類土師器・瓦



1伝茨田堤　2宮野遺跡　3常称寺遺跡　4大和田遺跡

fig.1 調査区位置図

器・陶器・磁器（註2）など）が出土しており、付近が弥生時代以降、人々の生活の舞台になっていた事を思わせる。

註1　梶山彦太郎、市原実「大阪平野むかしむかし」『国土と教育』第3巻第6号（1973）

2　江谷寛氏により『門真町史』（1962）に報告されているもの、及び今回の調査により出土した資料による。

調　査　結　果

A．土層及び遺物の出土状態（fig.2、PL.2・7）

（南調査区）

掘削深度は、おおよそG.L.－2mである。そのうち、G.L.－1m位までは、近年の盛土の他、茶色系の色調を呈するシルト層が数層認められ、それ以下では、グライ化した粘土及びシルト層が見られた。前者からは、室町時代の土師器・瓦器・瓦、また、江戸時代の陶磁器が出土した。後者からは、室町時代の土師器・陶器の他、曲げ物などの木製遺物も出土した。また、A地区の暗緑灰色粘土層からは、古墳時代の須恵器が数点出土し（fig.3－1～3）、古墳時代の包含層かと考えさせたが、確認するには至らなかった。

（北調査区）

伝茨田堤に接した部分にあたり、南調査区とは土層の状態が異なる。室町時代に属する遺物包含層は、南調査区ほど厚くなく、G.L.約60cm以下から、古墳時代の遺物を含む灰色シルト層が、約30cmの厚さで認められた。その層からは、土師器（甕）・須恵器（蓋杯・高杯）・滑石製有孔円板が出土した（fig.4）。

B．遺　　構

南調査区で、木組みの遺構が出土した。広がりは、東西では、A～E地区で確認され、短かくとも23mを測るが、さらにどこまで延びるかは、不明である。南北方向では、B地区北延長部断面ですでに検出されず、南は調査区内で

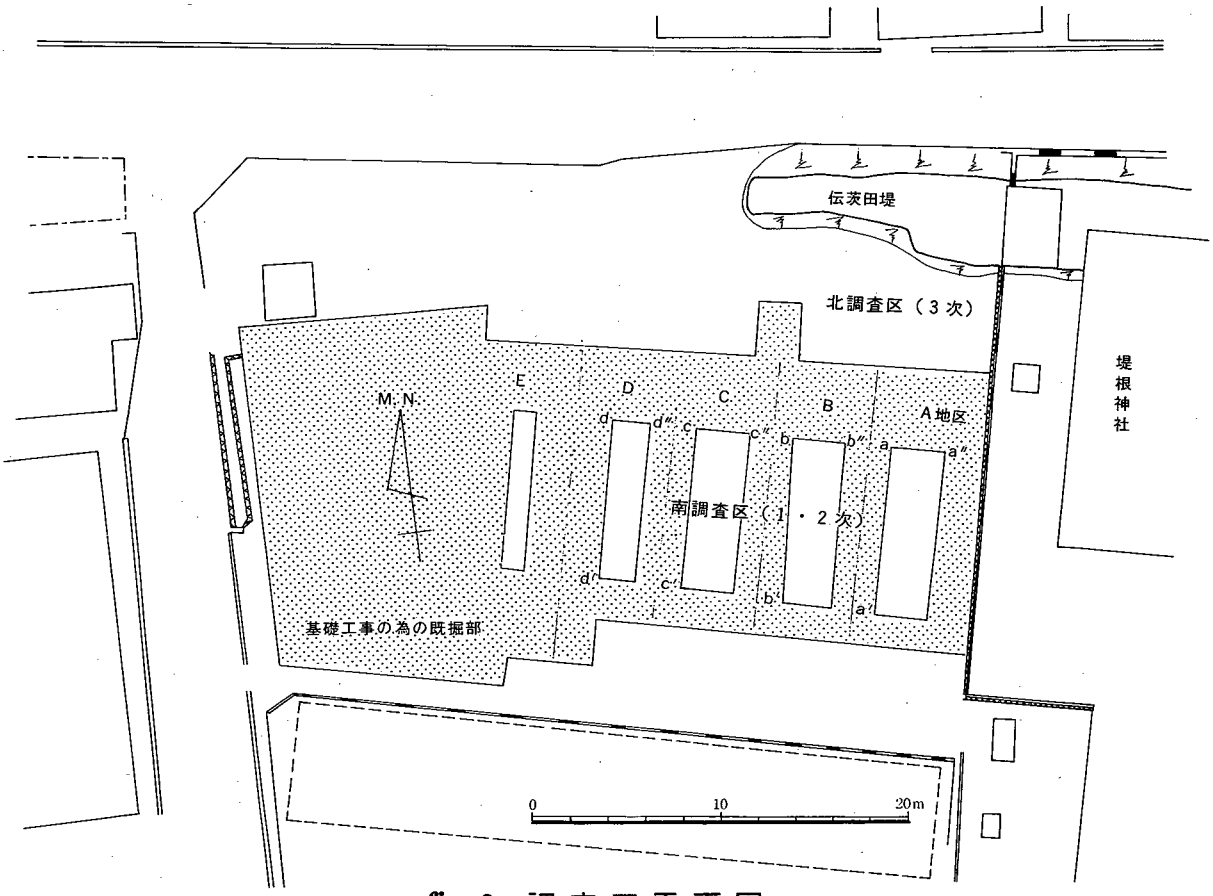


fig.2　調査区平面図

おさまり、５～６ｍの巾が考えられる。このように、東西に細長い遺構で、次のような構造を有している（ｆｉｇ．５、ＰＬ．６）。

直径１０㎝前後の自然木を、北をやや高くして、南北の向きに置き、それを、0.４～１ｍ位の間隔で東西に並べ、なかには、それにそわして垂直に打ち込んだ杭で固定しているものも見られた。そして、それらの自然木に直交する方向で、細目の枝を、それらの上下に縫わせている。さらに、その上下には、細い枝や茎、葉などを敷きつめ、また、４０㎝前後の厚さで、盛土を行なっている。築造時期は。その上下で、検出された遺物（ｆｉｇ．３－４～１８）から、室町時代前半頃と考えられる。また、その遺物は、土師器の皿が圧倒的に多く、注意をひくところであった。

C．遺　　物

古墳時代の土師器・須恵器・有孔円板、中世の土師器・瓦器・陶磁器、また、近世の陶磁器が出土した。とりわけ、中世の土師器皿は、多く検出された。以下、調査次ごとに代表的な遺物を紹介したい。

第１次調査　（fig. 3）

古墳時代

須恵器の杯蓋、高杯が出土した。１は、天井部を丸く仕上げるタイプの杯蓋である。天井部と口縁部の境界の段や口縁端部が、まだ比較的シャープで、５世紀後葉の時期が考えられる。(註1) 2.3は、高杯の脚部である。５は、脚台部のつくりが丁寧で、５世紀代のものである。３は、６世紀代の製作であろうか。

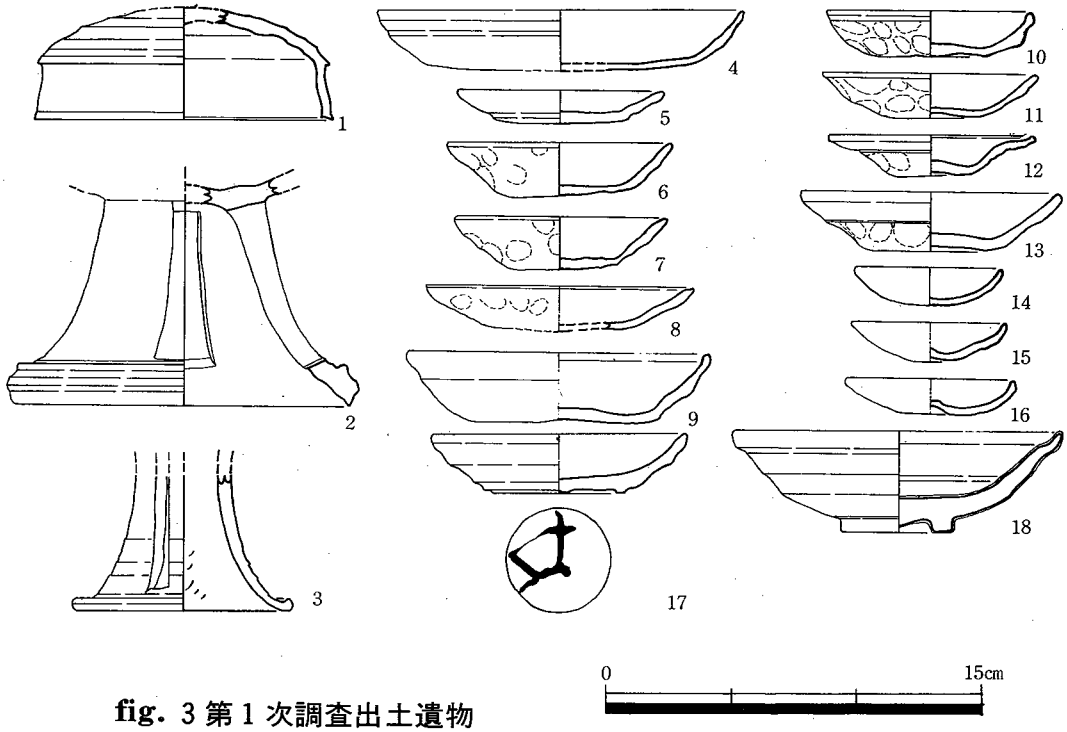


fig. 3 第１次調査出土遺物

４～16は、土師器の皿である。

４は、口縁部に一度横ナデを施こした後、さらに、口縁部をつまみあげるように横ナデしており、整形、調整が丁寧で、胎土は、精良である。平安時代後

葉までさかのぼるものであろうか。(註2)

５～１６は、１４～１５世紀の製作年代が考えられるものである。(註3) 整形、調整は、粗雑で、体・底部外面に指オサエの跡を明瞭に残すものが多いが、５及び１４～１６は、丁寧につくられ、特に１４～１６は、外面全体にヨコナデが及び、胎土も精良である。器形は、①平坦な底から強く外傾する口縁部がつづき、口縁部のナデにより、底部との境に段を有するもの、（５）②平坦な底部から強く外傾する体部、口縁部がつづくもの（８）、③平坦～上底気味の底部から、より弱く外傾する体部、口縁部へとつづくもの（６・７・９・１０）、④平坦な底部から、体部・口縁部にかけて、内弯気味に立ちあがるもの（10）、⑤くぼみ底気味の底部から、指オサエにより外反する体部、さらに、横ナデにより内弯する口縁部へとつづくもの（１２・１３）、⑥底部から体部、口縁部にかけて内弯しながら立ちあがるもの（１４～１６）などが見られる。口径は、１４～１６を除き、大きく、８㎝前後、１０㎝前後、１２㎝前後に分けうる。

１７は、瀬戸焼の皿である。底部外面に墨書を有するが、意味は不明である。２５は、中国製の白磁である。色調は、灰色を呈し、釉には荒い貫入が全面に入る。前者は、１５～１６世紀、後者は、１４～１５世紀の製作と考えられる。(註4)

第２次調査（PL．３・８）

第２次調査における出土遺物はコンテナ約５箱である。遺物は層序によって大きく二つに分けることができる。上層の褐灰色シルト層は厚さ約７０㎝で２層にわかれて堆積しており、近世の整地層と考えられる。この層は主として瓦類・陶磁器類を包含している。下層の黒灰色シルト層は厚さ３０～４０㎝の堆積でやはり２層にわけることができる。包含されている遺物はそのほとんどが土師器の皿で稀に瓦器・銅銭の出土をみたほか、須恵器もこの層に含有されていた。

土師器皿（１～３６）皿と一括したが径７㎝前後の小型品から径１０㎝前後のものまでさまざまな大きさがある。しかしながら１１㎝を越えるものはみられない。これらの皿は径6.5～8.7㎝、器高１～２㎝のグループと径8.5～11㎝、器高1.5～2.5㎝のグループの二つにわけることが可能である。前者では

特に径８㎝前後、器高1.5㎝前後に集中する傾向がある。器形は底部から内弯しつつ一気に口縁部まで達っするものと、平坦に近い底部から屈曲して口縁部に至るものの二者がみられ、径の大きなグループには後者が多い。調整はユビオサエと横方向のナデが多用される。口縁部内外面は横方向のナデで仕上げ、体部外面にユビオサエの観察されるものが多い。なおこれらの皿はいずれも黒灰色シルト層より出土したものである。

瓦質土器（37）　同じく黒灰色シルト層より出土したものとして瓦器　(37)がある。まっすぐ上にのびる口頸部から口縁端部が屈曲して短かく外に開く。胴部はあまりふくらまず最大径は下半にあり、底部は欠失しているが、丸い底に脚台もしくは高台がつくものと推測される。口頸部から胴部上半は縦方向のこまかいヘラミガキを施し、胴部下半ではヘラミガキが横方向になる。内面はナデで仕上げるが粘土継ぎ目が残っている。

陶磁器（３９～４２）　いずれも褐灰色シルト層より出土したものである。染付碗には径に比して器高の大きいもの（３９）と小さいもの（４０）がある。

須恵器（３８　４３～４５）　いずれも黒灰色シルト層より土師器皿と混って出土している。壺（３８）はまっすぐ上方にのびる頸部と短かく外反して丸くふくらむ口縁部をもつ。筒形器台（４３）は筒部のみの破片で、縦長の透しが６方向に設けられ、体部には７条を１単位とする波状紋が描かれている。ほかに甕（４４・４５）がある。

第３次調査　（fig.４、ＰＬ.９）

古墳時代の包含層から、土師器・須恵器・滑石製有孔円板が出土した。

土師器は、器形の明らかなものとして、甕（１）・壺(２)・鉢形土器（３）が出土した。１は、口縁端部を内側に肥厚させ、布留式に属するものであろう。胎土は荒く、色調は淡灰茶色を呈す。２は、体部が球状をなし、外面にハケ目調整を施すが、内面は不調整で、３～４㎝の間隔で粘土の継ぎ目が観察される。内外面に、炭化物や煤の付着は、見られない。３の鉢形土器は、口縁端部に、内傾する面を有し、底部外面に回転を利用したヘラ削りを施す。内面と口縁部・体部外面は、横ナデ調整を施こしている。あるいは、生焼けの須恵器とも考えられる。

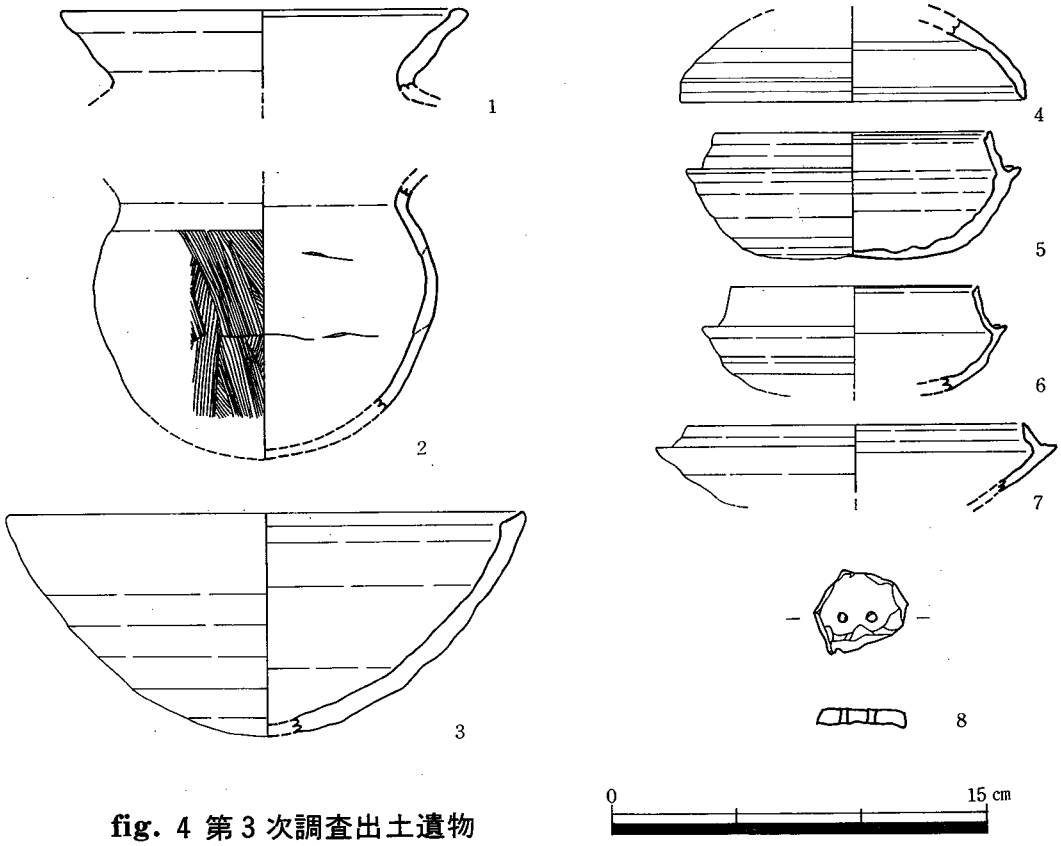


fig. 4 第3次調査出土遺物

須恵器では、杯及び杯蓋が出土した。5～7は、杯である。それぞれ、6世紀前葉・同中葉、7世紀前葉に位置付けられる。4は、杯蓋で、7世紀前半の製作と考えられる。

滑石製の有孔円板（7）は、欠損、剥落がはなはだしく、残存径1.5～2㎝、厚さ2～3㎜を測り、径1.5～2㎜の孔を2ケ所にあけている。

まとめにかえて

『古事記』仁徳天皇の条は、「又泰人を役して茨田堤・茨田三宅を作りたまひ云々」としるす。門真市宮野の堤根神社北側付近には、現在も茨田堤と伝えられる堤が残り、一部が府史跡に指定されている。今回の調査区は、この伝茨田堤の南隣接地にあたる。調査の結果、堤の方向にそって、東西に長い、盛土を伴なった木組みが検出された。この遺構は、その構造、規模・伝茨田堤との位置関係、また、これより堤寄りの北調査区でより高い位置において古墳時代の包含層が検出された事などから、伝茨田堤本体の補強、あるいは、側溝のようなものを推定す

るなら、その堤と考えられよう(fig.5)。しかしながら、工事に制約された部分的な調査であった為、堰の可能性も含めて、今後の調査により、さらに検討される余地を残している。築造時期は、室町時代前半頃である。土師器を始め

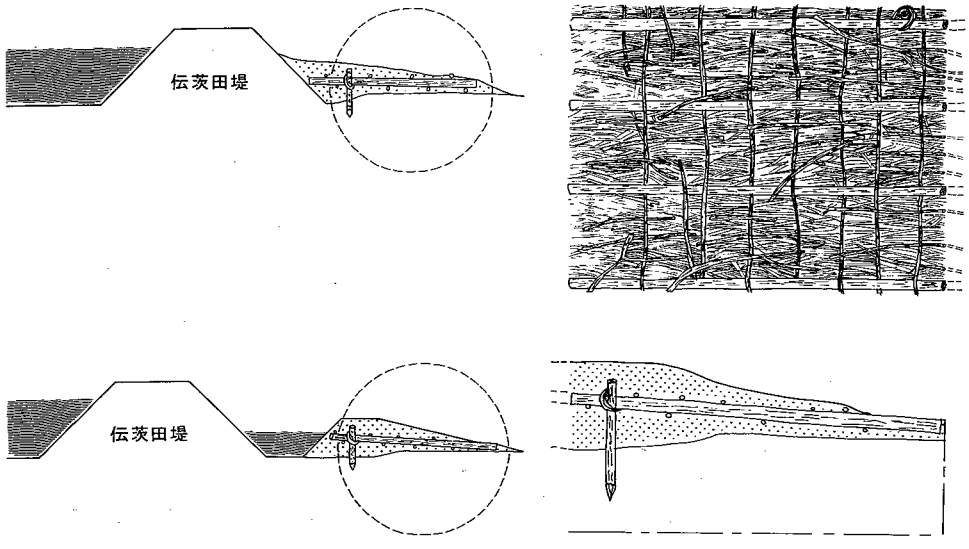


fig. 5 木組み遺構復元模式図及び想定図（縮尺任意）

とする皿が多く伴出し、なかには、木組みの上に置いた状態のものも見られた。これを築くにあたって、祭りを行なったのであろう。次に、北調査区では、古墳時代の包含層を検出しえた。ここからは、有孔円板や、土師器の壺が出土しており、やはり祭祀を行なった事を伺わせる。 しかし残念ながら、今回の調査では、これら、古墳時代の包含層、室町時代前半頃の木組み遺構と伝茨田堤本体との関係を明確にはしえなかった。今後の調査により、伝茨田堤の築造時期、修造時期、また周辺地域の様相などが明らかにされ、地域史のイメージがより具体的なものとなる事が期待される。

註1　須恵器の年代観は、田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』(1966)による。

2　宇野隆夫「京大病院遺跡出土の土器－古代末から中世－」『京都大学構内遺跡調査研究年報』京大埋蔵文化財研究センター(1977)

3　松藤和人「同志社キャンパス内出土の土器、陶磁器の編年－中近世を中心として－」『同志社キャンパス内出土の遺構と遺物』同志社大学校地学術調査委員会

4　福田英人氏の御教示による。

付　常称寺遺跡

門真市常称寺町におけるマンションの建築計画が出されたのに際し、大阪府教育委員会が、昭和５６年１１月２３日・２４日に試掘調査を実施したところ、中世の遺物包含層が検出されたので紹介しておく。地点は、宮野遺跡の西約３００ｍにあたり、さらに西約１００ｍには古川が南流する。

包含層は、現ＧＬから凡そ－１ｍから－1.5ｍの範囲に存在する。また、包含層の分布範囲は工事予定地の北部に限られた。

出土遺物は、瓦器・瓦質土器・土師質土器等が見られる。ｆｉｇ．６－１は、

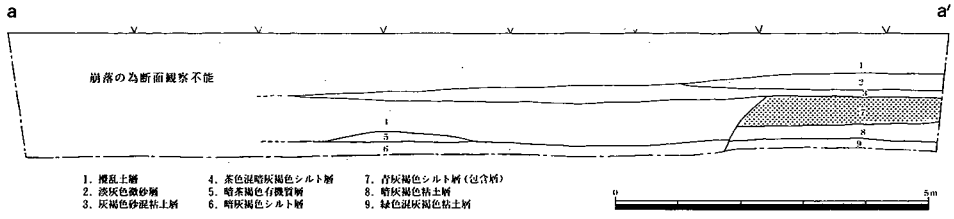


fig. 6 Ｔ.Ｐ.３南拡張トレンチ西断面図

瓦器の椀である。内面には暗文が施こされ、外面は不調整で、底に断面三角形の低い高台を貼りつけている。２は、瓦質の羽釜である。三足がつくタイプであろうか。内外面を横ナデにより調整している。胎土は、細砂及び金雲母片を含む。３は、土師質の皿である。口縁部は、横ナデにより調整し、端部は軽くつまみあげている。底部内面はナデ調整、外面は不調整である。胎土は、細砂、金雲母、クサリ礫を若干含むが、比較的精良である。焼成は、やや軟質である。４は、土師質の羽釜である。内外面は、横ナデにより

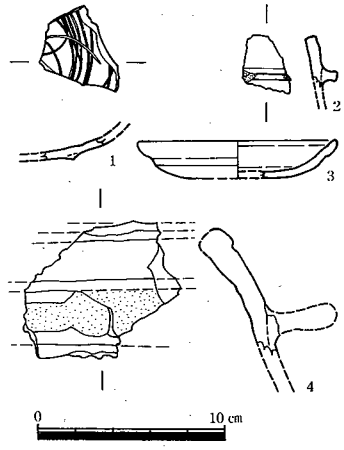


fig. 7 常称寺遺跡出土遺物

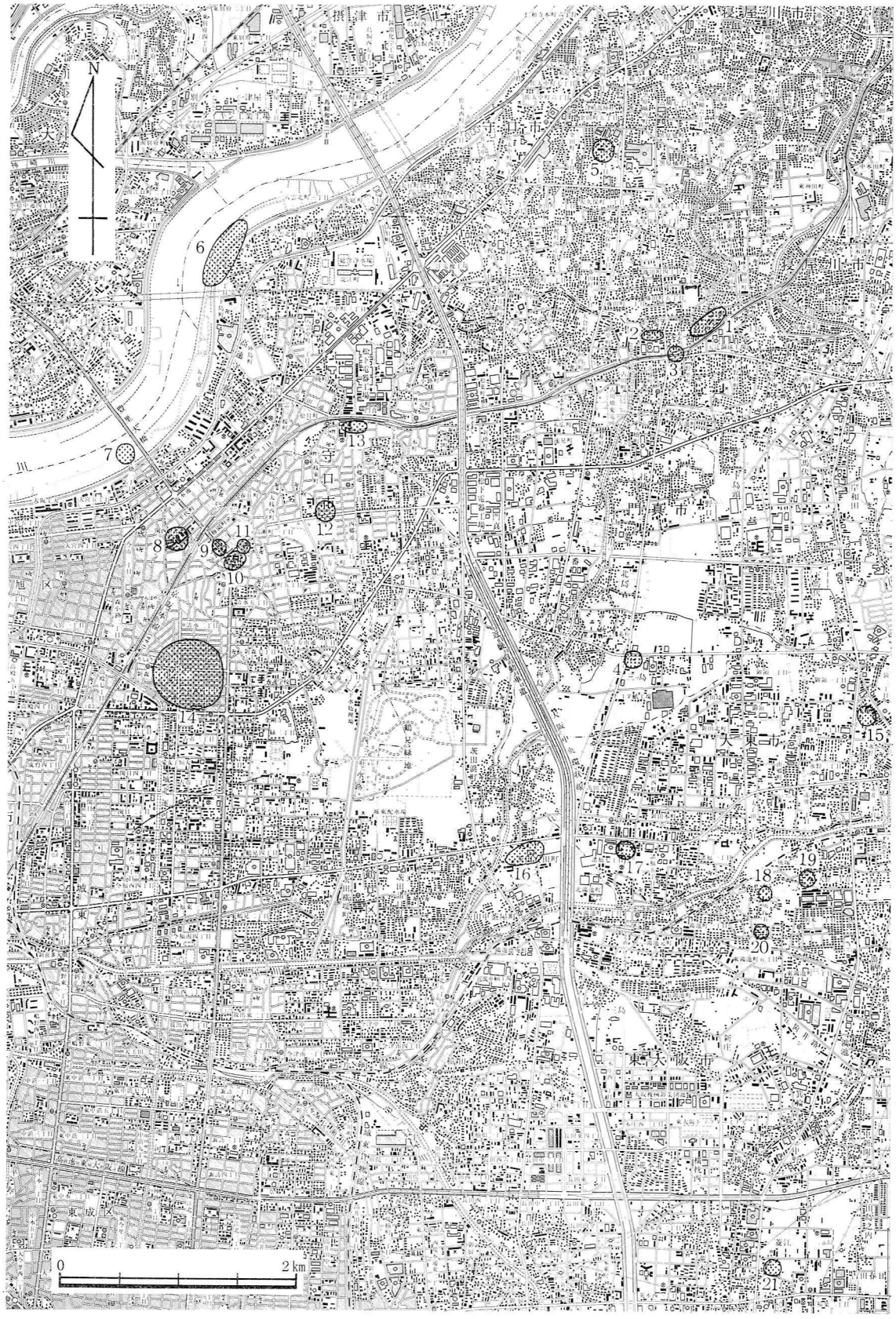
調整する。つばの下には煤の付着が見られ、使用していた事を伺わせる。口縁端部の折り返しは、矮少化している。胎土は、石英・長石の砂礫を多く含み、荒い。これら土器類の製作時期は、１４世紀と考えられる。

また、当該地は、現G.L.から５～６ｍ以下で、カキ等の貝殻を多く含む層が見られる。

遺跡の範囲・性格、さらに宮野遺跡や古川との関係等、今後の調査により明らかにされねばならない課題である。

遺跡地名表

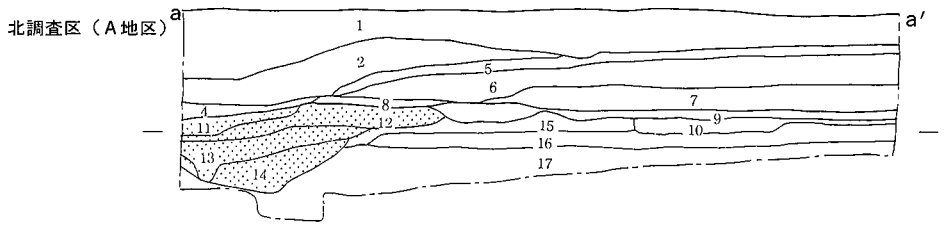
1. 伝茨田堤、宮野遺跡
2. 常称寺遺跡
3. 大和田遺跡
4. 三ツ島遺跡
5. 金田町２丁目遺跡
6. 八雲北町地内遺跡
7. 橋寺廃寺跡
8. 文園町遺跡
9. 長池町遺跡
10. 馬場町遺跡
11. 高瀬寺跡
12. 東光寺２丁目遺跡
13. 西橋波西之町遺跡
14. 森小路遺跡
15. 水野遺跡
16. 茨田安田遺跡
17. 西諸福遺跡
18. 灰塚堂田遺跡
19. 水道局浄水場遺跡
20. 灰塚遺跡
21. 菱江寺跡


N
0
2 km
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21

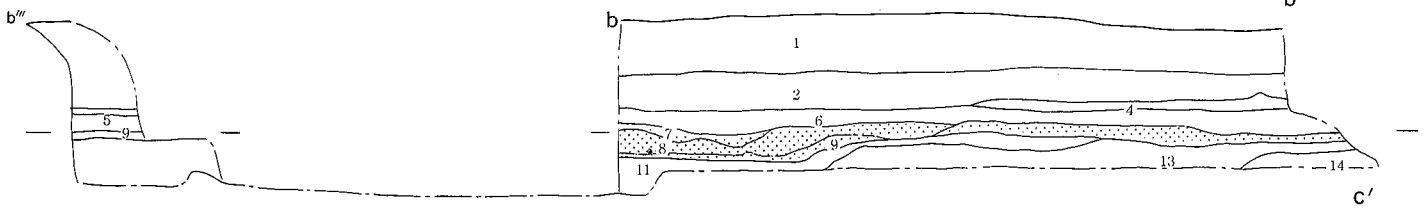
北・南調査区断面図

P.L.2

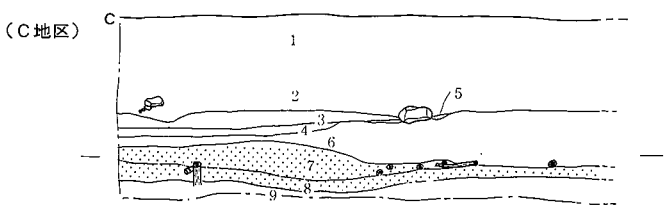
A地区
1 灰茶色土層
2 茶色砂質土層
3 暗茶灰色シルト層
4 茶黄色シルト層
5 暗茶灰色シルト層
6 茶灰色シルト層
7 暗茶色シルト層
8 暗茶色シルト層
9 黄茶色シルト層
10 茶色シルト層
11 緑灰色シルト層
12 青灰色粘土層
13 暗茶灰色腐食土層
14 暗茶灰色粘土層
15 暗青灰色粘土層
16 黒色粘土層
17 暗緑灰色シルト層



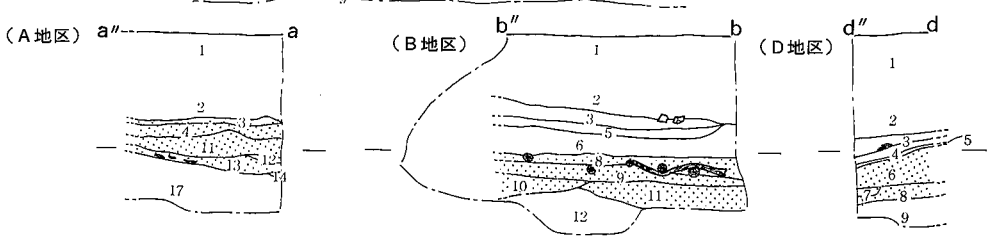
B地区



B地区
1 灰茶色シルト層
2 茶灰色シルト層Ⅰ
3 茶灰色シルト層Ⅱ
4 茶黄色シルト層
5 黄茶色シルト層
6 青灰色シルト層
7 暗青灰色シルト層
8 緑灰色シルト層
9 暗茶灰色シルト層
10 灰緑色シルト層
11 暗緑灰色粘土層
12 黒色粘土層
13 暗緑灰色シルト層
14 明緑灰色シルト層

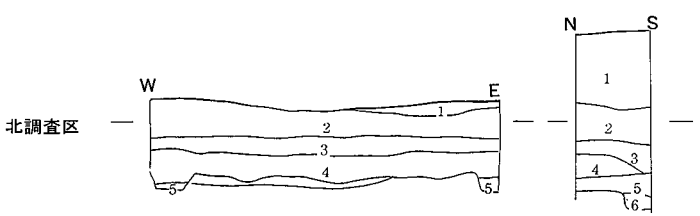


C地区
1 灰茶色シルト層
2 茶灰色シルト層
3 暗茶灰色シルト層
4 黄茶色シルト層
5 灰色シルト層
6 青灰色シルト層
7 暗茶灰色シルト層
8 暗茶色腐食土層
9 暗緑灰色シルト層

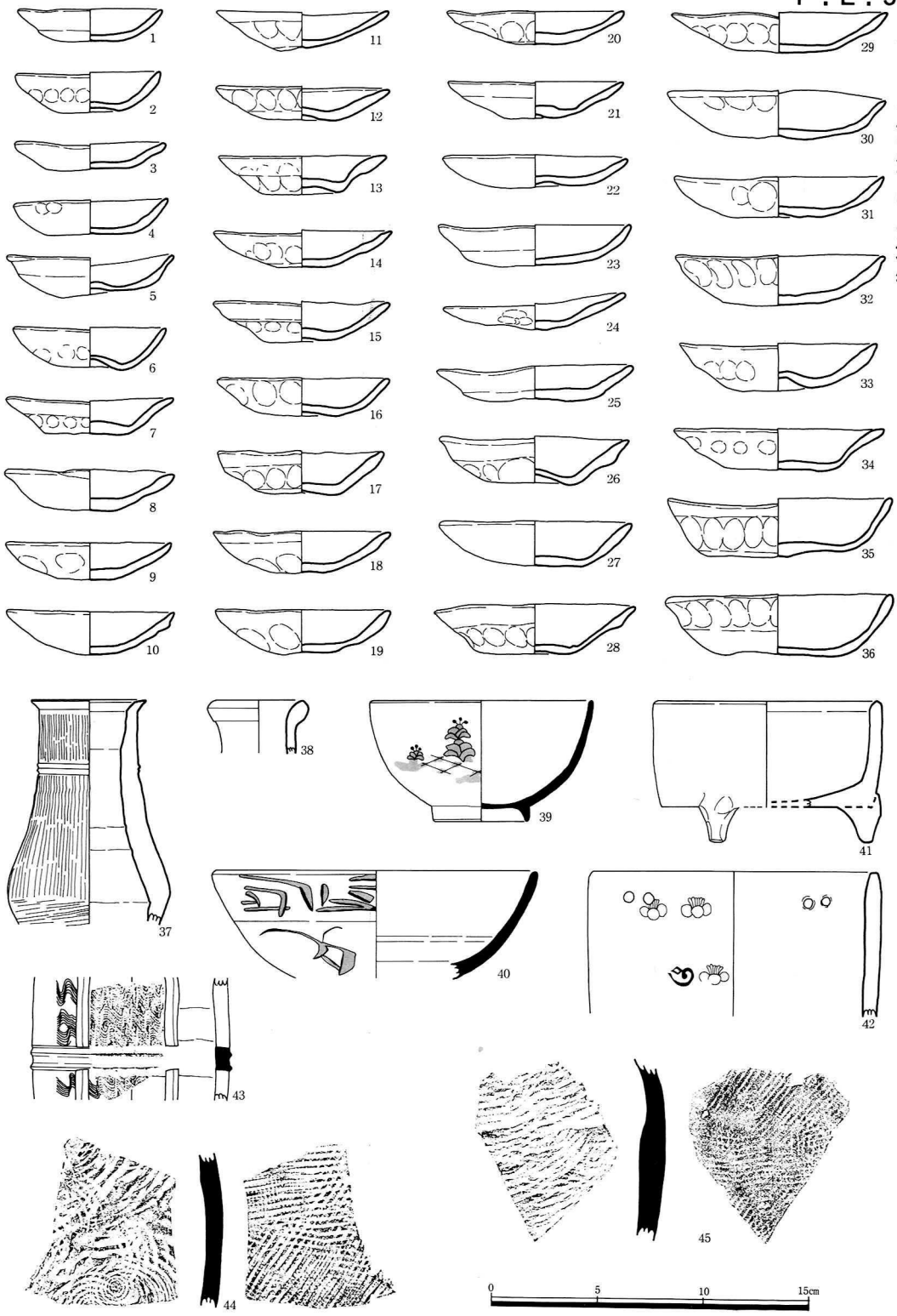


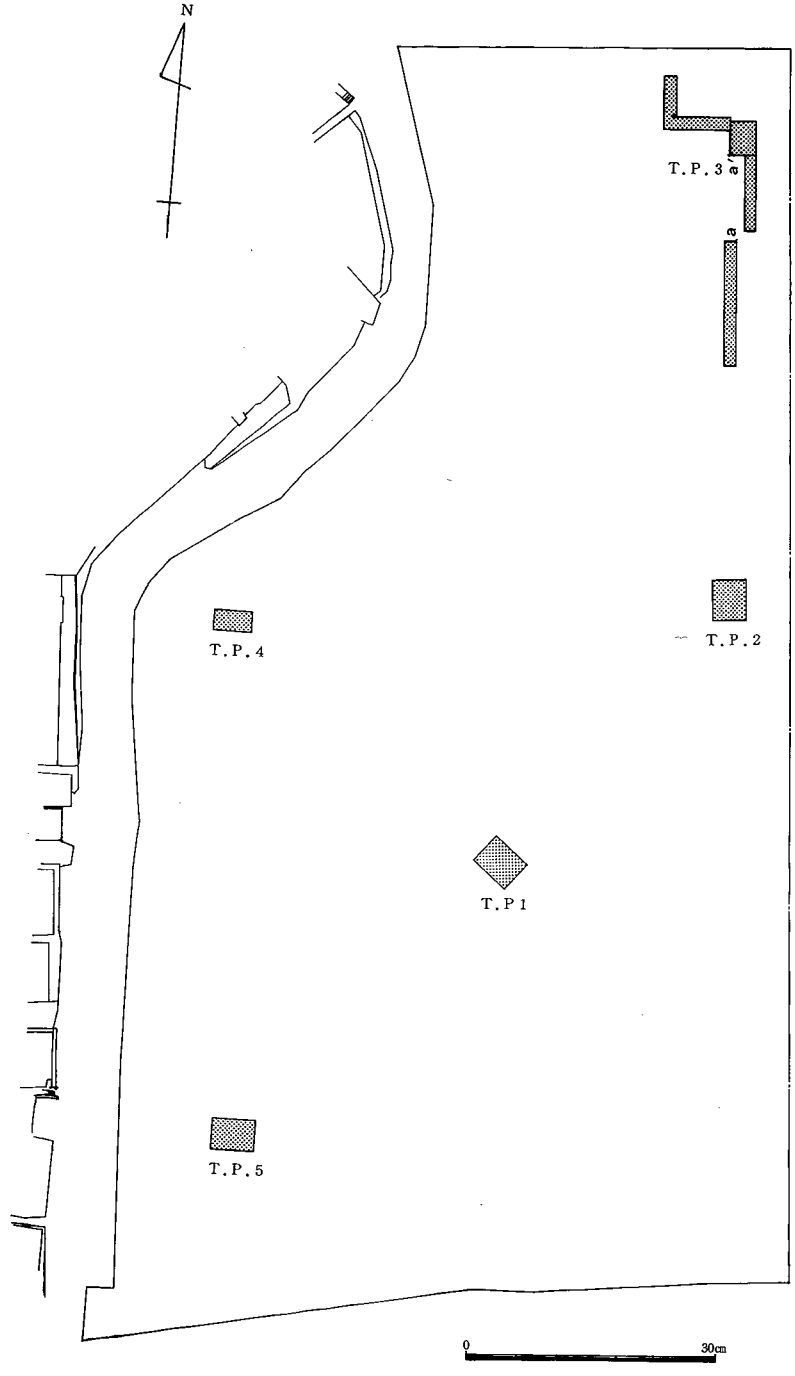
D地区
1 灰茶色シルト層
2 茶灰色シルト層
3 暗茶灰色シルト層Ⅰ
4 〃 Ⅱ
5 腐食土層Ⅰ
6 暗緑灰色シルト層
7 腐食土層Ⅱ
8 暗緑灰色砂混シルト層
9 暗茶灰色シルト層Ⅲ

第3次調査区
1 暗褐色土
2 灰褐色土
3 暗黄褐色シルト
4 灰色シルト
5 灰黄褐色シルト
6 黒灰色シルト

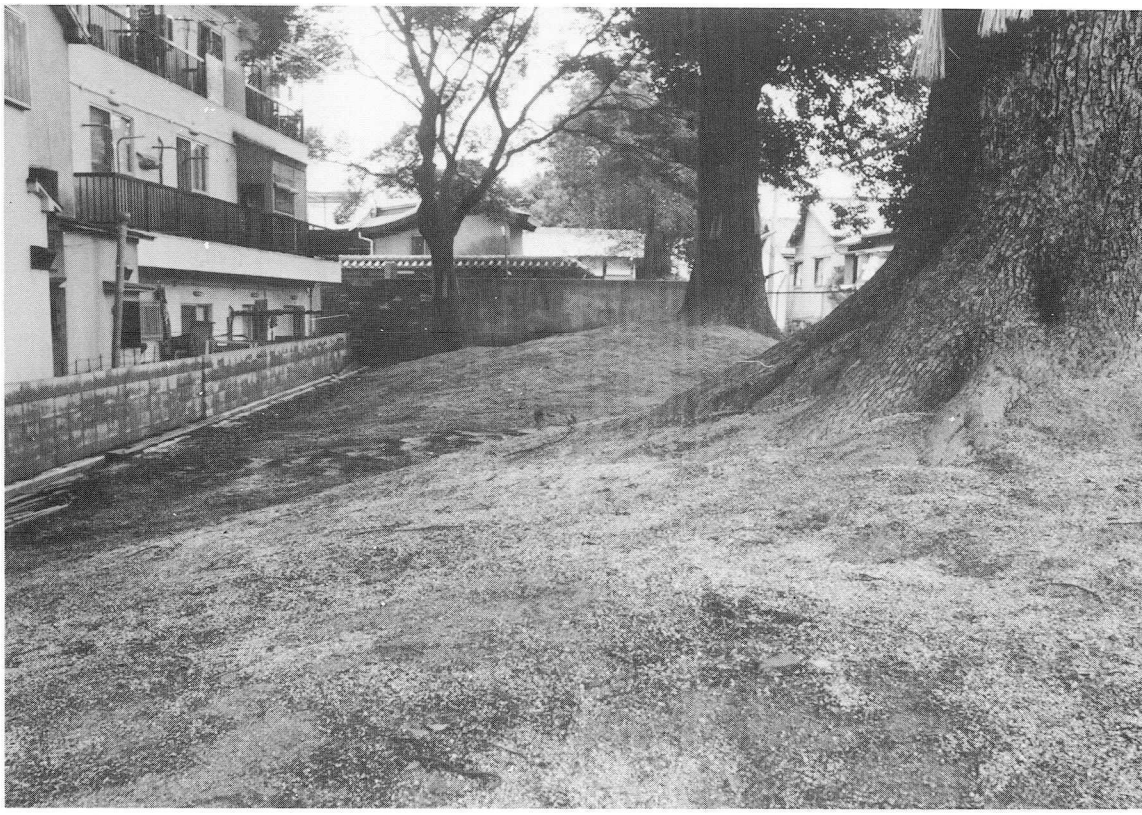


第2次調査出土遺物


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
0
5
10
15cm



常称寺遺跡テストピット位置図



伝茨田堤（東→西）

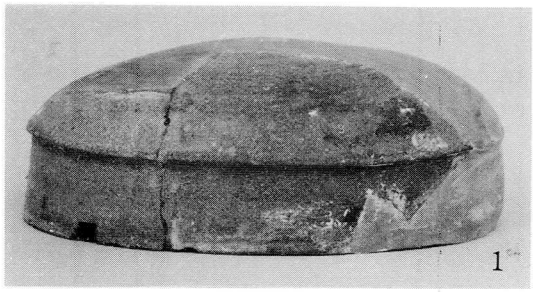
調査区近景（西→東）

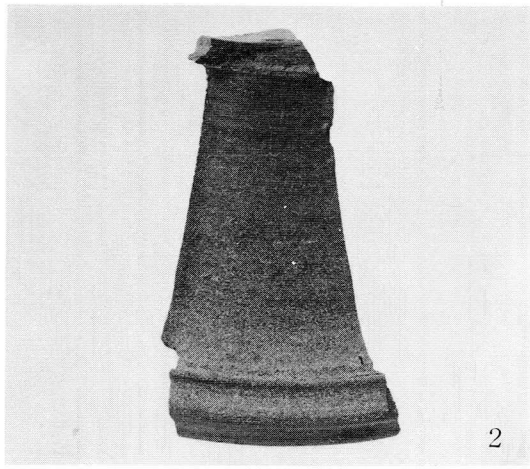
木組み遺構平面（北→南）

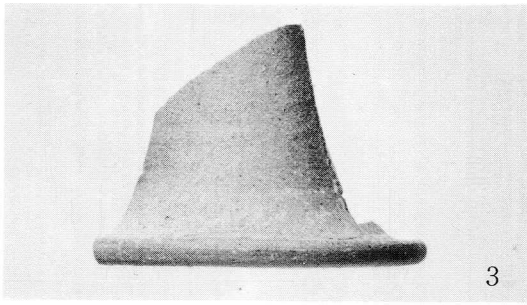
同　（南→北）

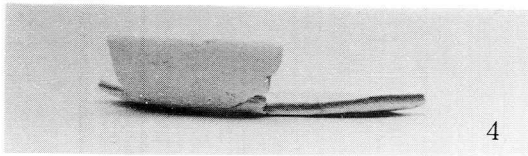
木組み遺構断面及び遺物出土状態

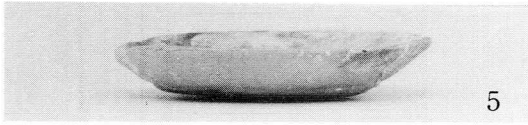
杭及び遺物出土状態

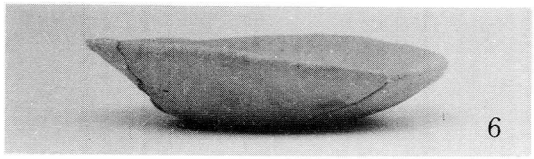

1

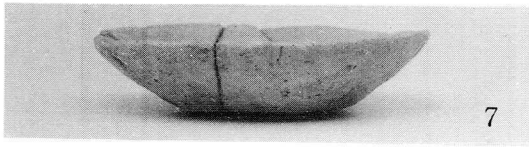

2

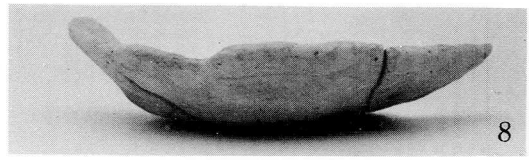

3

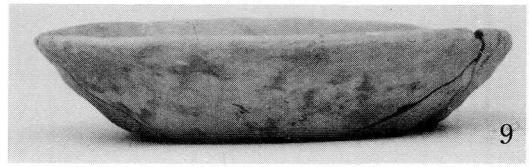

4

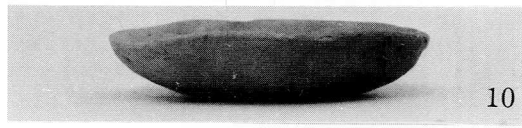

5

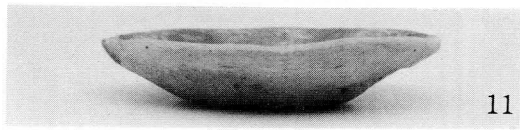

6

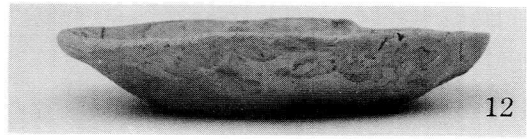

7


8


9


10

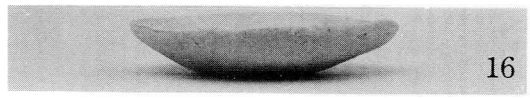

11


12

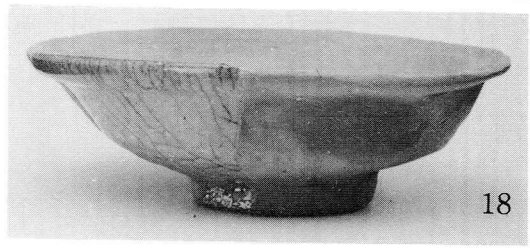
13

14

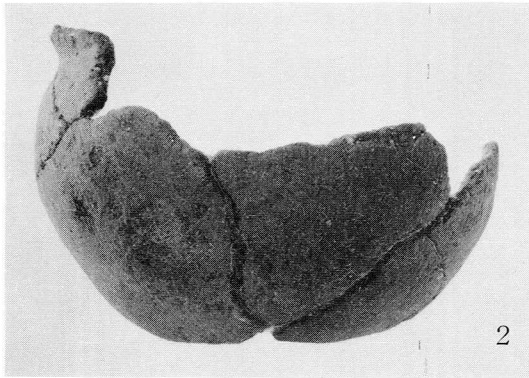
15

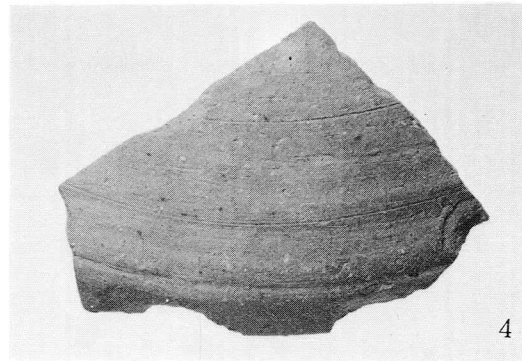

16

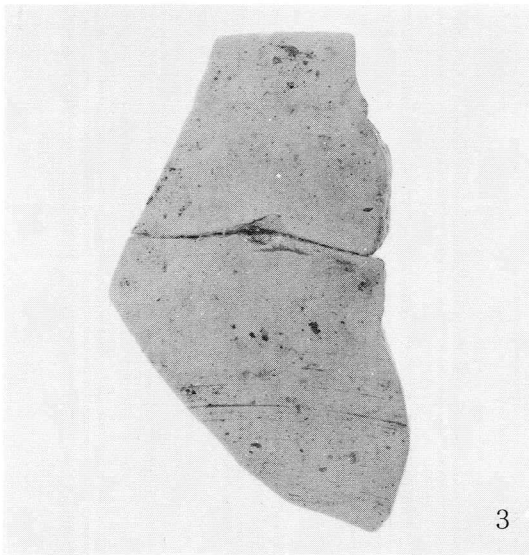
17

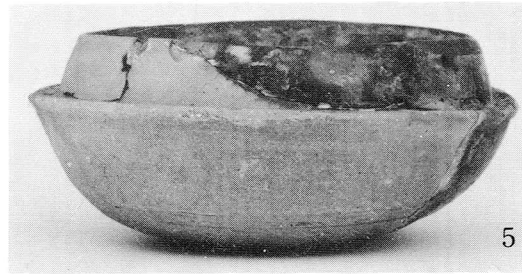

18

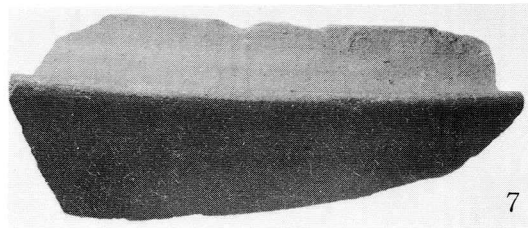
第 1 次調査出土遺物

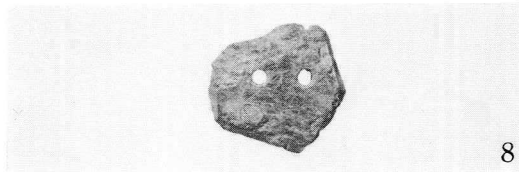


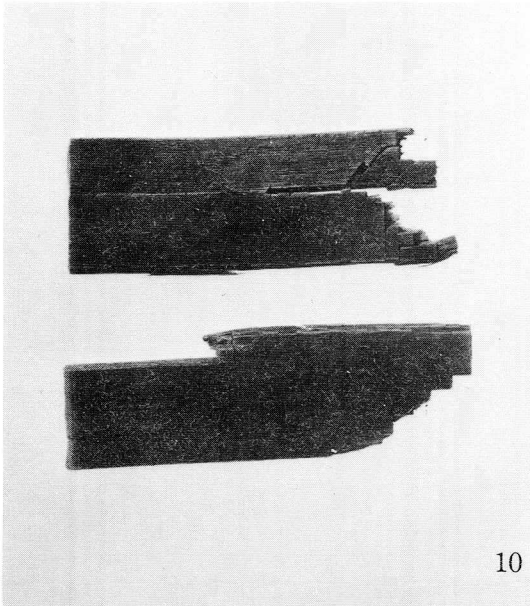


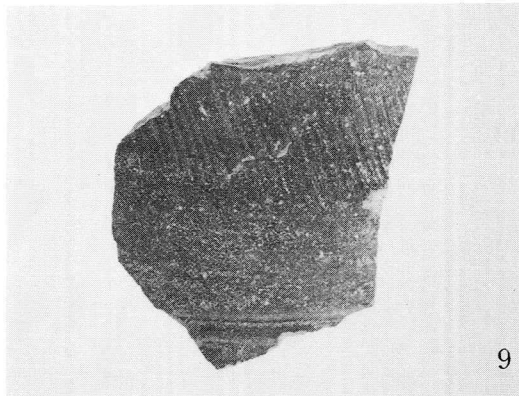












第 3 次調査出土遺物

宮野遺跡発掘調査概要正誤表

頁	行	誤	正・補足
1	11	（土器類土師	土器類（土師
2	14	色粘土層から	色シルト層から
3	2	6）。	6）。←ツメル
4	12	4～16は、土	中世 4～16は、土
〃	14	整形、調整が	整形・調整が
6	7	瓦器（37）	瓦質土器（37）
7	4	剥落がはなは	剝落がはなは
〃	11	その構造、規	その構造・規
8			fig.5の右上図 180°逆転
〃	16	委員会	委員会（1978）
9	6	現GLから凡	現G.L.から凡
	12	ろうか。	ろうか。←ツメル
P.L.1			遺跡分布図
P.L.4		30cm	30m
P.L.2		北調査区（A	南調査区（A
〃		2.5m	5m
〃		木組み遺構をはさむように上下に堆積する灰色系シルト層	
〃		南北調査区のレベル基準線は認意。 （但し、各調査区内は同一レベル）	
〃		断面図は、1・3次調査時のもの	